

ジョウゼフ・コンラッドと『ブラックウッズ・マガジン』

——19世紀末のイギリス文芸と帝国主義——

西 村 隆

19世紀のイギリスにおいては、富山太佳夫氏が指摘しているように「活字はほとんど唯一の巨大なメディアであった。そしてその巨大な活字市場のある部分が、『エディンバラ評論』、『クウォータリー評論』、『ウエストミンスター評論』、『同時代評論』、『フォートナイトリー評論』などの活字のみに頼る雑誌に分有され、あるいは『コーンヒル・マガジン』のような挿絵も使う総合雑誌に分有されたのである」（富山 155）。こういった出版文化の隆盛に支えられた小説の黄金期はイギリス帝国主義の最盛期と軌を一にしている。そしてエドワード・サイードが『文化と帝国主義』の中で述べているように、それは偶然ではないのである。「…帝国主義的な態度や言及や経験を形成するに当たり、小説は非常に重要な役割を果たした…。…近代のリアリズム小説の元祖は『ロビンソン・クルーソー』であるが、それが遠い非ヨーロッパの島に自らの領土を築くヨーロッパ人の話であることは偶然ではない」（Said xii）。

文芸雑誌に（イギリスから見て）遠い異国の地や、そこで植民地経営に精を出すイギリス人たちの姿を描いた小説やエッセイが載る——そういう状況下では、出版文化と帝国主義は相互依存的な関係にあった。帝国主義的な関心や好奇心が雑誌の売り上げを促進し、またそういう小説やエッセイによって「教育」された読者が帝国主義の運営を支える、というように。ヴィクトリア期のイギリスの社会と文化を研究する際に、出版文化と帝国主義を結ぶこのような言説の網の目を吟味しておくことは重要な作業の一つであろう。

イギリス文学史上、19世紀を代表する小説の一つと見なされているジョウゼフ・コンラッドの『ロード・ジム』（1900）には、出版文化と帝国主義のこの関係が意識的に書き込まれている。「休日に読むような軽い読み物 (light holiday literature) を一通り読み終え、船員になりたいということがはっきりしてくると、彼はさっそく「商船隊の高級船員養成のための練習船」に乗り組むことになった」（"Lord Jim" 443）。帝国主義事業の重要な担い手である商船の船員が「読み物」の影響によって生み出される過程がまず描かれているのである。そもそも『ロード・ジム』を掲載した雑誌『ブラックウッズ・マガジン』自体が、異国情緒溢れる東洋やアフリカを舞台とした小説や紀行文を売り物の一つとしていた雑誌であるから、この一節に込められた皮肉と諷刺は複雑な問題を孕んでいる。コンラッドの評伝を書いたジョセリン・ベインズは、『ブラックウッズ・マガジン』とコンラッドのこの微妙な関係についてこう述べて

いる。

『ブラックウッズ・マガジン』は保守的・伝統主義的な雑誌であって、男性的で勇壮な物語(masculine story-telling)を読者に提供するのが好みだった。ウィリアム・ブラックウッド [この雑誌の版元の経営者] はコンラッドに対し、この目標に従うよう熱心に頼んだ。ブラックウッドがこんなことを頼んだのも、コンラッドの芸術を誤解していたからであり、そのことはこの二人がやり取りした手紙からコミカルなほどに浮かび上がってくる。ブラックウッドはコンラッドに対し、「まあ例えば、アーヴィング氏の「タイガー・マジスティ」のような路線の」ものを何か書いて欲しいと書き送っている [1897年10月28日付けの手紙]。(Baines 281)

ベインズはこのように、コンラッドの芸術的理想とブラックウッドの思惑との齟齬を強調している。しかし「アーヴィング氏の「タイガー・マジスティ」のような路線の」ものを何か書いて欲しいというブラックウッドの言葉の意味を正確に把握するためには、まずこの「タイガー・マジスティ」という文章を実際に読んでみる必要があるだろう。ベインズは上の引用に見られる通り、「タイガー・マジスティ (虎閣下)」の内容をそのタイトルだけから推測して「勇壮な物語」(masculine story-telling)の一例と即断しているふしがあるのだが、果たして本当にその推測は正しいのか。我々はまずこれを実際に検証することから始めてみることにしよう——この糸を手繰っていくことで、19世紀末のイギリスにおける出版文化と帝国主義の関係の一端を明らかにすることを目標に据えながら。

I

「タイガー・マジスティ」とは、いつ、どこで発表された文章なのか。それを推測するのはそれほど困難ではない。1897年に『ブラックウッズ・マガジン』の版元の経営者からコンラッドに宛てた手紙に名前が出てくるのだから、この時期の『ブラックウッズ・マガジン』に掲載された文章なのではないかという予想がひとまず成り立つ。そして実際、この時期の『ブラックウッズ・マガジン』を繙いてみると、1897年11月号に「エドワード・A・アーヴィング」と署名のある「タイガー・マジスティ」という文章が見出せる。(同じ号には、コンラッドの短編小説「カレイン」が掲載されている。)

タイトルを見た限りでは「勇壮な物語」かと思ってしまう「タイガー・マジスティ」であるが、読んでみると実はそもそも「物語」ではないことが分かる。その内容は、ごく簡単に言えば東南アジアの華僑や中国本土の中国人に対してイギリスが採るべき外交政策についての提

言を行うエッセイである。F. D. トレドリーの『ブラックウッド社の歴史 1804-1954年』(1954)によれば、エドワード・アーヴィングはマレー半島・マレー諸島についての記事を物していた文筆家であり(Tredrey 193)、実際「タイガー・マジスティ」においてもアーヴィングは東南アジアの華僑の思考について盛んに想像力を巡らしつつ、事情通であることを誇示している。つまりブラックウッドがコンラッドに「タイガー・マジスティ」のような物を書いて欲しいと言ったのは、血沸き肉躍る「勇壮な物語」を書いて欲しいという意味ではなく、長く東南アジアで船員をしていたコンラッド(「カレイン」もマレー諸島が舞台である)に対して「東南アジアの事情通であることを活かした物を書いて欲しい」と要請する意味だったのではないかという推測がひとまず成り立つ。そしてその点では、初めて出版社に原稿を送った時にマレー語で「舵」を意味する「カムディ」(Kamudi)というペンネームを用い、東南アジアの風物を知っていることを売りにしようとしたコンラッドも、この路線からそれほど外れていたわけではなかったはずである。

さて、「タイガー・マジスティ」の内容を詳しく読んでいくことにしよう。まず冒頭では、このタイトルの由来となっているエピソードが語られている。かつて3人の中国人が海賊行為をしたかどでシンガポールで裁判に掛けられ、イギリス人の裁判官による裁判が行われた。博識な裁判官はイギリス流の正義にのっとり、懇切丁寧に判決やその理由を(ラテン語の専門用語を使いつつ英語で)述べたが、被告や傍聴席にいた中国人たちは英語もラテン語も分からなかったので、裁判官は今の判決を中国語に翻訳するよう法廷付きの通訳に頼んだ。だが、この通訳も実は裁判官の言ったことが分からず、やむを得ず被告の方を向いて、威嚇的な態度を取りつつデタラメにこう叫んだ。「おい、悪党ども！ このお方[裁判官]は、明日お前らの首をちょん切るとおっしゃっているぞ！」もちろん、この恫喝的な台詞は裁判官の言ったこととはかなり違っていたのだが、それを聞いて裁判官が本当にそう言ったものと思込んだ傍聴席の中国人たちはむしろ感心した。「これこそ本当の正義だ。あの裁判官は、虎のように威厳のあるお方("Tiger Majesty")だ！」と。

このエピソードによってアーヴィングが示唆しようとしていることは、イギリス流に裁判の公正さを遵守するよりもむしろ高圧的・威嚇的に犯罪を取り締まる態度の方がアジアの人々に好まれるのではないかと、ということであるらしい。つまり、この裁判官が則っているような懇切丁寧な、加害者の人権にも考慮するようなイギリス流の考え方がアジアの人々からも歓迎されるとは限らない、むしろ(通訳の誤った「翻訳」が体現しているような)強硬な姿勢と威嚇を示した方が喜ばれ、尊敬されるのではないかと、いうわけだ。このエピソードを冒頭に掲げた上で、アーヴィングは続けてこう述べる。

植民地の原住民に対する我々の政策が問われている今、そして真実を語ることが美徳だと

は思っていない人種に対してさえ言論の自由を適用すべきだとか、偽証をすることも一つの功績だと考えている人々に対してさえ陪審員による裁判を適用すべきだといった信念の上でイギリスの民主主義がもたっているこの時こそ、我々の〔植民地〕経営を原住民の視点に立って問い直してみるべき時だ。私は本稿において、私が最もよく知っている海峡植民地〔東南アジア〕における我々の支配について、それが中国からの移民の目にどのように映るかを描写していきたいと思う。さらに中国本土の現状や、どのような状況を与えれば中国人が満足するのかということを示していきたい。(Irving 699)

これがつまり「タイガー・マジスティ」という論説全体のテーマである。(ここで問題なのは、東南アジアのイギリス領に住む華僑についての話と、イギリスの植民地ではない中国本土に住む人々についての話がアーヴィングの文章中においては明確に区別されていないため、彼の話のテーマが植民地経営なのか、それとも中国に対する外交政策なのかははっきりしないということである。しかし後を読んでいけば分かるように、アーヴィングの関心の中心は「イギリス人は中国人の目にどのように映るように振る舞うべきか」という一般論にあるので、この2つの区別は必要ないと考えているらしい。)

この後アーヴィングは、中国南部の農村の貧しい家に育った無学な若者が、口減らしのためにマレー半島にあるイギリスの植民地に働きに行く(アーヴィングによれば「典型的な事例」という設定で例え話をしていく。その例え話の内容は、大まかに要約すると以下の通りである。

中国からイギリスの植民地に出稼ぎに行く若者は、旅の途中で蒸気船(西洋文明の結晶)に乗っても一時的な感銘しか受けず、農園の経営者である「赤毛の悪魔(イギリス人)」との面接の際にも何が何だかさっぱり分からないまま、とにかく雇われて働くようになるが、その労働環境は劣悪である。何も分からぬまま仲間に誘われ、悪事に手を染めるようになるが、捕まっても警官に賄賂をやって逃げたり、もしくは刑期を平然と務めたりするだけで(刑務所の労働や食事は彼の以前の生活と比べて別にひどくはないので)、結局、イギリス流の法の概念を正しく身に付けることはない。こうして数年かけて30ポンドか40ポンド(自分の農村に帰って田地を買うのに十分な金額)を稼ぎ、自分の村に戻る。

さて、こうやってイギリスの植民地で働いてきた中国人は大勢いるのだが、彼らがその経験を通じて抱くようになったイギリス人のイメージとはどのようなものか。

イギリス人は、もちろん愚かで騙され易い。イギリス人には所有権とか善悪の法則が分かっていない。イギリスの「役人」は、中国の役人と同様、腐敗していて賄賂でどうにでもなる。(Irving 702)

このように現状においては、イギリスの植民地での経験が、むしろイギリス人を軽蔑する要因を作り出している——とアーヴィングは締め括る。つまり中国人から見ればイギリス領の司法制度や刑罰は甘すぎるというわけだ。

このような議論をしてきた後でアーヴィングは、イギリス流の裁判とは対照的な、強硬なやり方を採ったあるフランス人の神父の話をする。アーヴィングが中国にいた時、彼の知り合いのフランス人の神父の教会で立て続けに盗難が起きた。その直後、その村のある中国人の若者が次々と高価な靴やコートを買ひ、村人たちは彼がどこからその金を手に入れたのかと怪しんだ。すると神父は、西洋流の法的な考え方からすればまだ証拠が不十分であるにも拘わらず、「中国式の考え方に則って」この若者をいきなり捕まえ、さんざん打ち据えた上、屋外に縛り付けて一晩さらし者にした。それでも若者は罪を否認したので、神父はさらに拷問具を拵え、若者にそれを見せた上で「拷問に掛けてから、今晚もまたさらし者にするぞ」と脅した。するとようやく若者は窃盗を自白した。

このエピソードを紹介した上でアーヴィングは、この神父のやり方に賛意を表し、これとは対照的な西洋式の「生ぬるい」裁判のやり方を批判する。「明らかに有罪と思われる者が、[西洋式の裁判においては] 法的な屁理屈によって無罪放免になったりするため、我々の考える正義は中国人に軽蔑されている」(Irving 710)というのだ。そして、このエッセイをこう締め括っている。

公然と平和が乱された場合、それを厳しく取り締まることが、中国人の理想を満足させてやる方法である。さらに「タイガー・マジスティ」[＝威厳のある統治者]という飾りを付けてやれば、中国人の美的な欲望を満たしてやることもできるだろう。このような、本物の「[ヴィクトリア] 女王陛下の平和」を与えてやれば、中国人はそれ以上何も要求しないだろう。(Irving 710)

このように、イギリス人は威厳のある統治者として強硬な態度で中国人に（あるいは東洋人に）接するべきだというタカ派的な外交・植民地政策を提言するのがアーヴィングのこのエッセイの主眼である。彼の見方が中国人（東洋人）に対して著しく差別的・軽蔑的であることは言うまでもないが、ここでは批判を急ぐよりも前に、このエッセイを一つの視座として19世紀末のイギリスの言説を見渡してみることにはしたい。このエッセイが発表された1897年はヴィクトリア女王の即位60周年に当たり、世界各地の植民地から徴兵された様々な人種の「大英帝国の軍隊」がバッキンガム宮殿の前を行進するという、帝国主義を象徴する記念式典が盛大に行われた年であり、のちにレーニンによって帝国主義がクライマックスを迎えたと記された年でもあった。その雰囲気の中で、東洋に対する外交・植民地政策を提言するエッセイが発表

されたのは、むしろ自然なことだったのである。

II

イギリス式の法の概念が、犯罪の加害者に対してさえその人権を尊重するほどに公明正大なものであり、諸外国と比べるとその公明正大さの度合いが大きいという見方は、当時のイギリス国内において多くの人に共有されていたらしい。例えばコナン・ドイルのシャーロック・ホームズ物の一つ「踊る人形」(1903)には、アメリカから来た悪漢(殺人事件の犯人として逮捕された男)とイギリスの警察官との間に以下のようなやり取りがある。

「私自身の弁護のために一番良いのは、真実を洗いざらい話すことでしょうな」

「私の義務として警告しておくが、話した内容は後で君にとって不利な材料に使われるよ」と警部がイギリス刑法の度外れた公正さ(the magnificent fair-play of the British criminal law)を示して叫んだ。(Doyle 544)

取えて本当のことを言おうとしている容疑者(そして実際、真犯人でもある)に対し、話せば不利になると予め警告するイギリスの警察官の「公正さ」がここでは強調されている。しかしドイルは、被疑者に対するこういった「公正さ」が捜査の際の足枷になるという考えも持っていたようだ。「退職した絵具屋」(1926)では、違法な手段を使って被疑者を自白に追い込んだホームズが、イギリスの警察官に向かってこう言っている。

「時には変則ということが役に立つこともあるのですよ。あなたがた[イギリスの警察]は、例えばですね、お前が言ったことは後で不利な材料に使われるぞと[被疑者に]警告する義務があるでしょう。それでは、この悪党にハツタリをかませて事実上の自白に追い込むなんてことは決してできなかったでしょうね。」¹⁾(Doyle 553)

悪党を相手にする時には法を遵守してなどいられない、というこのような態度が、特に非西洋の地域においては必要だと仄めかす作品もホームズ物の中には存在する。「悪魔の足」という短編においては、アフリカ帰りの探検家が殺人犯を自らの手で「処罰」した挙句、自分は非西洋の地域に長いこと暮らしていたために自らを法として行動する(be a law to oneself)ようになってしまったとホームズに告白する。

「私はあまりにも長く野蛮人の中で、法の埒外に暮らしてきたので、自らを法とするのが

習慣になってしまったのです。… 私の魂が〔殺人犯に対する〕復讐を求めて叫んでいたのです。ホームズさん、先ほども言ったように、私は生涯の大半を法の及ばない所で過ごしてきたために、ついには自らを法として行動するようになった人間です。」²⁾ (Doyle 522, 525)

このような態度は、アーヴィングがエッセイの中で支持している、裁判を待たずに被疑者を自分の手で拷問に掛けて自白に追い込んだフランス人神父の姿に酷似している。「悪魔の足」においても、ホームズはこのアフリカ帰りの探検家を見逃してやるので、上の告白にある程度賛同していると見ていいだろう。

このように帝国主義下のイギリスには、(特に非西洋の地域で) イギリス流の法を遵守しては犯罪者をうまく取り締まれない場合がある、という危機感があつたらしく、中国人(東洋人)に対しては被疑者の人権をあまり考慮し過ぎずに厳しい態度で犯罪を取り締まるべきだというアーヴィングの主張(もちろん、我々の目から見ればひどく差別的な考え方なのだが)もあながち彼一人のものではなかったわけである。(ちなみに「踊る人形」と「退職した絵具屋」の物語内の時代設定はどちらも1898年、「悪魔の足」の時代設定は1897年と推測されているので、いずれも「タイガー・マジェスティ」が発表された頃とほぼ同じ時期を扱っていると言える³⁾。)

ホームズのように時には自ら法を犯してまで断固として犯罪者を追い詰めるやり方は、アーヴィングにとっては「イギリスの司法制度や犯罪抑止のシステムは素晴らしい(きちんと犯罪を取り締まってくれる)」と中国人(東洋人)に印象付けるために必要な便法であり、強硬に犯罪を取り締まることは東洋におけるイギリス人の威厳の問題と関わっていたわけである。すなわちアーヴィングにとっては、中国人(東洋人)の前で「支配者にふさわしい威厳を備えた、虎のような閣下」として振る舞うことが、東洋におけるイギリスの覇権の維持に必要な条件と思えたということであろう。

「支配者」然として、「優れた人種」としての威厳をもって東洋人に接するというテーマを抽出してみた時、「タイガー・マジェスティ」と同様に『ブラックウッズ・マガジン』の1897年11月号に掲載されたコンラッドの短編小説「カレイン」にも類似したテーマが見られる。この短編においては、マレー諸島のある部族の族長となっているカレインという勇猛な男が、過去に自分が犯した罪(親友を殺したこと)の記憶に嘖まれ、知り合いである3人のイギリス人のところに助けを求めに来て、事の顛末を話す。カレインはかつて、一目見ただけの女性に幻想的な恋慕の情を抱き、彼女を(部族の掟に従って)殺そうとした親友マタラを止めようとして、咄嗟にマタラを殺してしまった。それ以来マタラの亡霊に怯え続けているカレインは、とうとうその恐怖に堪え切れなくなり、知り合いであるイギリス人の船に逃げ込んできたので

ある。彼は「私は、亡霊の存在など信じない人々 [=西洋人] と一緒に暮らしたい。そうすれば、私も亡霊のことを忘れられる」と言い、自分を西洋に連れていってくれと懇願する。だが、そう言われたイギリス人たちは、自分たちもカレインが想像しているほどには立派な人間ではない、むしろ「自分で勝手に作り上げた幻影に恋をしたり怯えたりするのは、我々イギリス人も同じだ」と思い、自分たちにはカレインを救う力がないと感じて途方に暮れてしまう。そんな中、3人のうちの1人であるホリスという男が一計を案じ、カレインに暗示を掛けて安心させてやろうとする。彼はヴィクトリア女王の肖像が刻まれた即位50周年記念の貨幣を「白人の護符」と称してカレインに与え、「これで亡霊を追い払える」と真面目な顔で宣言する。するとカレインはそれを信用し、安心して自分の部族へと帰っていく。

ここで注目しているのは、自分には「白人」として亡霊を調伏させる力があるという芝居をしてみせるホリスの態度である。もちろん、これはカレインを安心させてやろうという善意から発した行為なのだが、ここにはアーヴィングが奨励している態度との共通性が見られる。すなわち、東洋人を安心させるために「優れた人種」として振る舞い、(例えば「嘘をついてはいけない」といった) イギリス流の道徳を無視して行動するということである。ホリスは、ヴィクトリア女王の肖像が刻まれた貨幣には亡霊を調伏させる魔力が存在するという嘘をついて、カレインを安心させてやる。アーヴィングは、イギリス国内で適用されている公明正大な法の概念を捨てて強硬なやり方を探ることが、中国人(東洋人)を安心させてやるための良策だと主張する。どちらも、東洋人と接する時にはイギリス国内で通用している道徳を捨て、別のやり方を探る(優れた人種としての芝居をする)ことが、東洋人のためにもなると考えている。

「カレイン」について、もう少し詳しく見てみよう。この小説においては、カレインが「あなた方白人は、目に見えないものを信じないでいられる」と主張すればするほど、むしろ聞き手のイギリス人たちの心にはその反対の思いが現れる——つまり西洋人も、心の中では色々(カレインと同様に)不条理な思いに囚われているのだというテーマが強く打ち出される——という仕掛けになっている。まず、カレインが3人のイギリス人の船に来た時、3人のうちの1人である語り手の「私」は呪術的・超自然的な感覚に陥る。

雷の鮮やかな閃光のため、彼[カレイン]に面している丸い二つの船尾口が、残忍で青光りする一對の目のように輝いた。("Karain" 640)

語り手のイギリス人がこのような魔術的な感覚に捕らわれているとも知らず、カレインは自身の過去とそこからくる悩みを全て打ち明けた上でこう言う。

「あいつ[マタラの亡霊]はここ[イギリス人の船]には来られない。だから私はあなた

方の所に来たのです。白い顔を持ち、目に見えぬ者〔死者の亡霊〕の声を軽蔑するあなた方の所へ。…あなた方と一緒に、私は〔西洋へ〕行きます。…あなた方にとって、昼は単に昼であり、夜は夜であって、それ以上のものではない——なぜならあなた方は目に見えるものを全て理解し、それ以外の一切のものを軽蔑しているからです。あなた方の…国では、死者はものを言わず、みな賢く、独りで〔亡霊に取り憑かれていないで〕——そして平穏なのです！」

「素晴らしい描写だ」とホリスが微笑を浮かべて言った。("Karain" 641, 650)

ホリスの「素晴らしい描写だ」という言葉は明らかに皮肉である。すなわち、実は西洋人もカレインと同様、「目に見えないもの」（過去の思い出や妄執など）に悩まされたり操られたりしながら生きているのだ、という思いがあるからこそ、ホリスはカレインの言葉に苦笑してしまうのである。つまり読者から見れば、西洋人を買いかぶったカレインの言葉が、それとは対極にある西洋人の実情を照らし出してしまうのだ。このように過去の「亡霊」（思い出）や妄執に悩まされているカレインの姿が、単なる「迷信的なマレー人」としてではなく西洋人と共通する姿となって読者に迫ってくることにこそ、この小説のテーマがあると言っていいだろう。少し後のホリスの台詞が、それを裏書きしている。

「僕らは誰でも、女〔への想い〕に取り憑かれたことがあるだろう…君らだって認めるはずだ。それに、友人に関しては…途中で捨てられたり…そうさ！ 自分の胸に訊いてみるよ。」("Karain" 652)

このようにホリスは、実際には自分がカレインより特に優れているとは思っていないものの、カレインの亡霊を調伏させる力を持つ「超越的な白人」としての芝居をすることでカレインを救ってやろうと考える。すなわち「タイガー・マジスティ（虎閣下）」然たる演技をするわけである。カレインから「あなた方の呪文か武器」をくれと懇願されると、ホリスはカレインの前でがらくたが入った箱を開けながら（呪術の真似事をしようとしているのである）、他の2人に向かって言う。

「おい君たち、できるだけ厳粛な顔をしろ。…これは遊びなんかじゃない。僕は彼のために何かしてやるつもりなんだ。真面目な顔をしろ。ちくしょう！ 君たちはちょっとぐらい嘘がつけないのか…友人〔カレイン〕のために！」("Karain" 651-52)

こうしてホリスは「超越的な力を持つ白人」としての演技を続け、ヴィクトリア女王の肖像

が刻まれた貨幣をカレインに渡して、こう告げる。

「これは偉大な女王陛下の肖像で、白人が知っている物の中では最も強力だ」と彼は厳粛に言った。

カレインは敬意のしるしに短剣の柄を握り、[貨幣の中の] 王冠を被った顔を見詰めた。

「無敵で神聖なお方」とカレインは呟いた。("Karain" 653)

こうしてイギリス人たちから「亡霊は調伏された」という暗示を掛けられたカレインは、安心して自らの部落へと帰っていく。表面的には、ホリスの「虎閣下」としての演技が成功したのである。

だがこの小説の主題は、むしろカレインの話を通じてイギリス人たちが覗き見る、自らの心の中にも存在する不条理性にある。カレインと同様、自らの生み出した妄想や想念に囚われて恋や裏切りに走ることもしばしばあり、ヴィクトリア女王の強力な「魔法」(=権力)にひれ伏して生きているイギリス人たちは、カレインとどこが違うのか？ マレー人であるカレインから文明人として崇められる「白人」たちも、一皮剥けばカレインと同じように不条理な妄執に取り憑かれて生きている、それがこの小説のテーマである。

言い換えれば、イギリス帝国主義が一つのクライマックスに達した1897年に同じ雑誌に掲載された「タイガー・マジェスティ」と「カレイン」は、力点の置き方こそ違え、ある意味では同時代の読者に対して共通した一つの問題を突き付ける文章であったと言える。イギリス人が東洋人に接する時、東洋人を感服させるに足る「優れた人種」として振る舞うとすれば、そこにどんな問題が生じてくるのか？ アーヴィングは、イギリス国内で通用しているフェア・プレイ重視の法の概念を捨て、強権的な支配者として振る舞う必要があると主張した。コンラッドは、「優れた人種」としての演技をすればするほど(皮肉にも)ますます感じずにはいられない、自分たちの心の奥の不条理性に目を凝らした。東洋人に対して自らの優越性を強硬に主張しようとしたアーヴィングの態度と、東洋人の中に自らと共通する要素を認め、自己認識を深めようとしたコンラッドの態度は対照的ではあるが、ある意味では同じ問題に端を発していると言える。異なる文化圏の人々と接触し、自らの優越性を再確認しようとする一方で、逆に自らの「陰の部分」をも発見してしまうというディレンマは、帝国主義下のイギリスに生きる者にとっては決して珍しい問題ではなかったのだ。進化論の確立者として名高いチャールズ・ダーウィンの『人類の系譜』(1871)の末尾近くの一節は、そのことを雄弁に物語っている。

我々[西洋人]が野蛮人を祖先に持っていることは疑いようがない。荒れ果てた浜辺でフエゴ島の人々を初めて見た時の驚きを、私は決して忘れないだろう。私の心の中に、咄嗟

にこのような考えが押し寄せてきたのだ——我々の先祖もこんな感じだったのだ、と。フエゴ島の人々は裸で、体に絵の具を塗り、長い髪は縄れ、興奮して口から泡を吹いており、表情は野蛮で、驚きと不信に満ちていた。(Darwin 642)

ダーウィンのこの文章は、自らが「野蛮人」と見なしている非西洋の人々に対する西洋人の優越性を前提としている一方で、自らの先祖も「野蛮」であったということ、すなわち自らの中にも「野蛮性」の痕跡があることを認めてもいる。このように19世紀末のイギリス人が非西洋の人々を眺める眼差しの中には、自らの相対的な優越性の確認と、自らの中にもある醜怪な要素への認識とがないまぜになっていたのだ。

このことに注目するならば、同じ雑誌の同じ号に掲載された「タイガー・マジスティ」と「カレイン」とを繋ぐ、イギリス帝国主義という一本の糸がより明瞭に見えてくるはずである。すなわち、コンラッドに向かって「タイガー・マジスティ」のような物を書いて欲しいと注文したブラックウッドの言葉も、ベインズが考えるような「コミカルな誤解」には見えなくなってくる。西洋人は、「非西洋の人々は我々のことを正確には理解してくれないだろう」という不信感を抱えつつ、それでも何とかして支配者として振る舞わなければならないという課題を抱えていた。この問題に対する反応として出てきたのが、威厳に満ちた支配者として振る舞うべきだという主張（「タイガー・マジスティ」）であったり、非西洋の人々から特別な存在と見なされ、そのように演技を続けること自体への戸惑い（「カレイン」）であったりしたのである。

III

ここまで、『ブラックウッズ・マガジン』を軸にして、イギリス帝国主義を巡る19世紀末の言説のありようを見てきた。最後に、植民地経営に関するこの時代の人々の関心の高さとコンラッドの創作活動とを結び付けるもう一つのエピソードを概観して本稿の結びとしたい。

「タイガー・マジスティ」や「カレイン」が掲載されたのと全く同じ『ブラックウッズ・マガジン』1897年11月号には、「スコットランドの犯罪の暦」と題された文章が掲載されている。1600年前後のスコットランドにおける魔女狩りと、それに伴った虐殺を批判的に解説した論説であるが（ブラックウッド社はエディンバラが本拠地だったので、スコットランドでの恥多き魔女狩りの歴史はこの雑誌の編集者から見て決して他人事ではなかった）、恐るべき魔女狩りの実態と大虐殺を糾弾した後、筆者ハーバート・マクスウェルはこのことをアフリカにおける植民地支配の問題と結び付けて、こう締め括るのである。

もし、このような大虐殺が暗黒のアフリカ(darkest Africa)で行われたとしたら、その首謀者たちに対する我々の嫌悪感(horror)を表すのにどのような言葉が見付かるだろうか？
(Maxwell 669)

あたかもこの言葉とこの関心に応えようとするかのように、同誌の1899年2月号-4月号には、「暗黒の」アフリカでの残虐な植民地事業に対する嫌悪感(horror)を主題にしたコンラッドの「闇の奥」("Heart of Darkness")が掲載される。少なくともこの筆者とコンラッドは、同じ言説の中にいる——すなわち同じ関心の持ち方や語彙を共有しているのである。

このように『ブラックウッズ・マガジン』を軸にしたコンテクストの中にコンラッドの作品を置いてみた時に見えてくるのは、19世紀末のイギリスに生きるということが持っていた複雑さである。例えば「帝国主義時代のイギリスにおいては、非西洋の地域を野蛮と見なし、そこを文明化することを使命として掲げることで植民地支配を正当化した」というような概括は決して誤りではないが、ここまで見てきたように、事はそれほど単純ではない。例えばコンラッドもマクスウェルもダーウィンも、そのような「帝国主義的な」見方に安住していたわけでもなく、また逆にそういう議論を批判し去って済ませていたわけでもない。現代では一口に「帝国主義」とか「反帝国主義」という言葉で括られる言説が実は非常に複雑に織り上げられていることに我々は注意すべきであるし、例えば『ブラックウッズ・マガジン』のような当時の代表的な雑誌の記事を丹念に調べていくことで、この時代の言説を織り上げていた糸を一つ一つ手繰っていく地道な作業が今後も必要とされているのである。

*本稿は平成15年度科学研究費補助金(若手研究(B))の交付を受けた「19世紀-20世紀初頭のイギリス帝国主義思想と同時代の小説の論調との相関関係」の研究の成果の一部である。

<注>

本稿に引用されている文献の訳文は、全て私(西村)の訳である。必要があると思われるものに関してだけ、この注の中に原文を挙げることにした。

1. ここでのホームズの台詞を原文で挙げておく。

"The irregulars are useful sometimes, you know. You, for example, with your compulsory warning about whatever he said being used against him, could never have bluffed this rascal into what is virtually a confession." (Doyle 553)

2. ここでのこの人物の台詞は、原文では以下の通りである。

"I have lived so long among savages and beyond the law," said he, "that I have got into the way of being a law to myself. ... My soul cried out for revenge. I have said to you once before, Mr. Holmes, that I have spent much of my life outside the law, and that I have come at last to be a law to myself." (Doyle 522, 525)

3. ここに挙げたホームズ物の各短編の時代設定については、全て William S. Baring-Gould 編の *The Annotated Sherlock Holmes* の注に書かれている推測に拠った (Doyle 508, 529, 530, 532, 546)。

<引用文献>

Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenfeld, 1993; originally published in 1960.

Conrad, Joseph. "Karain: A Memory." *Blackwood's Edinburgh Magazine, July - December 1897*. Edinburgh: Blackwood & Sons, 1897. pp.630-56.

----- "Lord Jim: A Sketch." Chapters I-IV. *Blackwood's Edinburgh Magazine, July - December 1899*. Edinburgh: Blackwood & Sons, 1899.

Darwin, Charles. *The Descent of Man*. New York: Prometheus Books, 1998; originally published in 1871.

Doyle, Arthur Conan. *The Annotated Sherlock Holmes, Volume II*. Edited with Notes by William S. Baring-Gould. New York: Wings Books, 1967.

Irving, Edward A. "Tiger Majesty." *Blackwood's Edinburgh Magazine, July - December 1897*. Edinburgh: Blackwood & Sons, 1897. pp.699-710.

Maxwell, Herbert. "The Calendar of Scottish Crime." *Blackwood's Edinburgh Magazine, July - December 1897*. Edinburgh: Blackwood & Sons, 1897. pp.657-69.

Said, Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage Books, 1994.

Tredrey, F. D. *The House of Blackwood, 1804-1954: The History of a Publishing Firm*. Edinburgh: Blackwood & Sons, 1954.

富山太佳夫 『シャーロック・ホームズの世紀末』 東京: 青土社, 1993.